



ほうさ 第34号

1988年4月

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

屢示風よ り

字書と事典

—「ことば」と「もの」への知識欲—

4.9(土)~6.12(日)
(5.9(木)・20(金)は展示替休室)

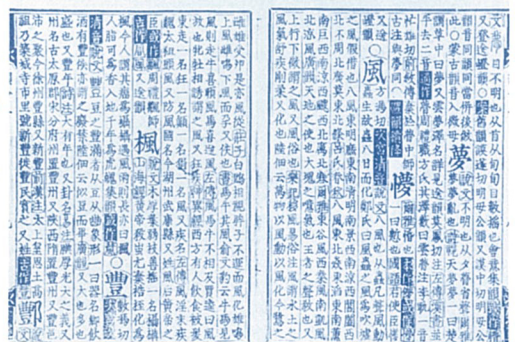
知識、学問の取得には、ことばの正確な理解がその第一歩となる。江戸時代までの我国で、主流となる知的生活を媒介したのは漢語、漢文であったため、漢字を理解し、自由に駆使できることが第一に求められ、必然的に「字書」が必要とされたのであった。

古く奈良時代以前には、「字書」を必要とする人々は限られていたから、輸入品の中国製の「字書」が使われていた。漢字には形、音、意味の三要素があり、中国では「字書」も三つの系統に分れて発達していた。日本では、形からその意味、用法を知る「玉篇」などの中国字書が、もっともよく利用され、時代が下るにつれ、これを模倣し、さらに和訓を付け加えた「新撰字鏡」や「倭玉篇」などの日本製の「字書」が編纂された。

漢字を音によって分類する「字書」は、音韻を重視する中国では、数多く編纂されたが、日本では、漢字を駆使して詩文を作成する一部知識人の利用に限られたため、一般にはあまり普及しなかった。(日本製のものでは、漢詩文作成の伴侶として多用された鎌倉時代の禅僧虎関師錬の著「^{しょうふんいんりやく}聚分韻略」が有名である。)ただし、日本で中国語の音韻が日常必要とされなかったとしても、漢語、漢文が知的生活の主流である以上、日本語の音から漢語の表記を探す必要は必然的に生じてくる。漢字を使用して文章を書く層の広がりもあり、「字書」にも実用性が求められていた。そこで登場したのが、いろは順に漢語を配列した「伊呂波字類抄」であり、これにつづいて中世から近世まで、その時々が必要に応じて多様な展開を見せた「節用集」であった。「節用集」は日用折節の用にあてるという名が示すように、必要に応じて簡単に漢語の表記が引けるように作られており、江戸時代には、草書体に平仮名の振仮名のついたものなども登場している。

漢字をその意味によって分類する「字書」は、中国ではすでに紀元前2世紀ごろの成立とされる「^{じが}爾雅」があり、「字書」のもっとも古い形であるが、日本で製作されたものでは、10世紀に成立した「^{わいめいりゅうしやう}倭名類聚抄」が最初である。これは、女性の教養の書として編纂され、漢語をその意味によって分類し、語の意味、漢字の発音、和名を記したもので、「字書」であるとともに、日用百科辞書的な性格も持っていたのである。

漢字は一字一字が辞(ことば)を表わすから、意味によって分類していくと「字書」から「辞書」へ、さらに詳細な事項の解説や引用におよべば、中国では「類書」と呼ばれる百科事典的な書物に発展する可能性



「古今韻会举要」(元代成立、日本・慶長年間刊)

を持っていた。すでに3世紀には編纂がはじまる「類書」は、多くの書物に登場する事項、語句を分類して調べやすくしようとしたものである。これは、万巻の書に収められた知識を必要に応じて摘出する有力な武器であり、書物の入手が容易ではなかった時代には、日本でも中国製の「類書」が知識人の間で珍重され、のちには日本人の手によっても編纂された。また、宋代の「太平御覧」1,000巻、明代の「永樂大典」22,877巻など、皇室の命による膨大は「類書」の編纂はこの世の知識、学問を掌中に収めようとする権力者の好むところでもあったようだ。

権力者に限らず、多くの知識を習得したいと思うのは誰もが望むことであり、それができるだけ簡単にわかりやすければ、それにこしたことはない。明代における出版文化の繁栄は、後に「図鑑」と呼ばれるものにも連なる「本草綱目」などの絵入の専門事典や、

「万宝全書」などの絵入の日用百科事書などを、大量に出版市場に送り出した。日用百科事書は、その内容の真偽には問題はあるものの、天文、暦、地理、産業、字書、絵画法、家相、人相、冠婚葬祭、医学等々、日常生活に必要な知識、教養が絵入りでコンパクトにまとめられており、同じような内容でいく種類も出版され、近世の初期には、日本にも数多く流入したようである。こうした出版事情を背景に成立するのが106巻におよぶ絵入大百科事典「三才図会」である。天、地、人の三才にわたる事物を図を挿入しながら解説したもので、中国本土に限らず、日本を含む中国文化圏全体に影響を与えたものと思われる。その後まもなく日本でも、我国の事物を加えて同様な絵入百科事典「訓蒙図彙」「和漢三才図会」が編纂されており、江戸時代を通じて版を重ねたベストセラーであった。

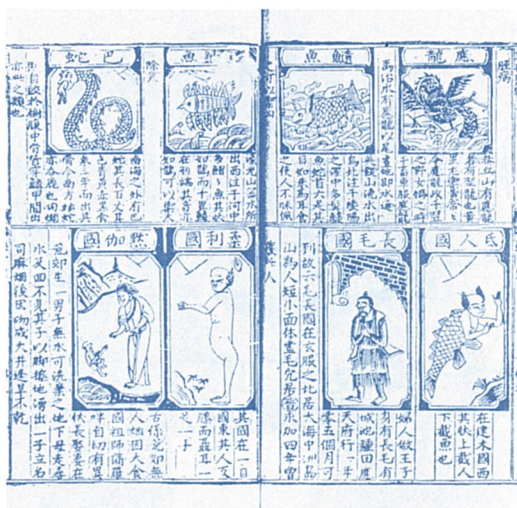
当文庫の前身、尾張藩御文庫の基礎となった徳川家康や初代藩主義直、二代光友等の書物収集も万巻の書の知識をすべて手の内に収めようと望んだかのように積極的で多様である。そして当然ながら、彼らの収集書の中で「字書」や「事典」は重要な位置を占めていた。書物好きな16才の義直が、大坂夏の陣の帰途、京都で購入した書物の中には、「玉編」「倭玉編」「節用集」「千字文」「古今韻会举要」「不求人博覧全書」などの「字書」「事典」があり、後に19,000冊におよぶ蔵書家となる義直の書物収集の出発点にふさわしい購入書である。さらに、寛永3年(1626)には、万暦37年(1609)刊行の「三才図会」をすでに購入しており、のちにその子光友も、蔵書に加えている。また、家康、義直、光友ともに、各自それぞれに明代の絵入日用百科事書を収集しており、藩主の夫人達も「訓蒙図彙」や「和漢三才図会」を所蔵する例が多かった。

知識、学問の入口であり、集大成でもある「字書」や「事典」は、それを所蔵しただけで、世の中

の知識、学問をすべて掌中に収めたかのような錯覚を与えてくれる。さらに図解入りであれば、その頁をめくるだけで、知識欲が満たされたかのように錯覚する。尾張藩の藩主や夫人達もこの錯覚によって彼らの知識欲を満たしたのかも知れない。また、それゆえに、「字書」や「事典」は永遠のベストセラーたりえるのかもしれない。

《参考文献》

山田俊雄『日本語と辞書』(中公新書494 昭和53年)



「文林聚宝万卷星羅」(明刊)



「牡丹名寄」(日本・貞享5年刊)

「字書と事典－『ことば』と『もの』への知識欲－」出品目録

〈字書〉

－中国－

1. 新刊爾雅
(晋) 郭璞注 二卷(「博古全雅」の内)
2. 説文解字五音韻譜
(宋) 李燾撰
(明) 万曆年間刊 12巻12冊
3. 説文長箋・六書長箋・長箋解題
(明) 趙宦光撰
(明) 崇禎4年序刊 110巻50冊
4. 玉篇(巻8.9.18.19.22.24.27)
(梁) 顧野王撰
(日本) 昭和7～10年旧鈔本影印 6巻6冊
5. 康熙字典
(清) 張玉書等撰
(日本) 安永9年刊 41冊
6. 重編広韻
(宋) 陳彭年等撰
(明) 嘉靖37年刊 5巻5冊
7. 韻鏡
(日本) 慶長年間刊 1巻1冊
8. 五音集韻
(金) 韓道昭編
(明) 万曆24年刊 15巻6冊
9. 古今韻会举要
(元) 黄公紹撰 熊忠举要
(日本) 慶長年間刊 30巻15冊
10. 洪武正韻
(明) 楽韶鳳等撰
(明) 初期刊 16巻5冊
11. 海篇心鏡
(明) 蕭良有撰
(明) 万曆22年刊 20巻6冊

－日本－

12. 新撰字鏡 天治本影印
釈昌住
昭和8年刊 12巻7冊
13. 倭玉編
慶長18年刊 3巻3冊
14. 玉編大全
毛利瑚珀
嘉永7年刊 10巻首1巻12冊
15. 聚分韻略
釈師鍊
室町時代刊 1冊
16. 和漢音釈書言字考節用集
横島昭武
享保2年刊 10巻13冊
17. 大全早引節用集
刊 1冊
18. 伊呂波字類抄
橘忠兼
江戸末期写 10巻10冊
19. 倭名類聚鈔
源順
元和年間刊 20巻10冊
20. 下学集 巻下
寛永20年刊 1冊
21. 和爾雅
貝原好古
元禄7年刊 8巻4冊
22. 同文通考
新井君美(白石)
寛保3年写 3巻3冊

23. 字音仮字用格
本居宣長
安永5年刊 1冊
24. 神字日文伝
平田篤胤
江戸末期刊 2巻2冊
25. 疑字篇
平田篤胤
江戸末期刊 1冊
26. 日本釈名
貝原篤信(益軒)
元禄13年刊 3巻3冊
27. 常語藪
岡田挺之(新川)
刊(寛政6年序) 2巻2冊
28. 東雅
新井君美
江戸末期写 21巻21冊
29. 雅言仮字格
市岡猛彦
文化11年刊 1冊
30. 雅語訳解
鈴木腹
文政3年刊 1冊
31. 古言訳解
萩原広道
嘉永4年刊 1冊
32. 俗語弁
山田千崎
安政～明治4年写 6冊
33. 韻鏡私書
室町時代写 1冊
34. 洋字篇
伊藤圭介著 西村良三(柳河春三)等校
天保12年刊 1冊
35. 和蘭字彙
桂川甫周等編
安政2年刊 13冊
36. 実用蘭和辞典
ファンデ・スタット
大正11年刊 1冊
37. 通俗英吉利単語篇
梅浦元善訳
明治4年刊 1冊

〈事典〉

－中国－

38. 北堂書鈔
(唐) 虞世南撰
(明) 万曆28年刊 160巻20冊
39. 唐宋白孔六帖
(唐) 白居易撰
(明) 刊 100巻51冊
40. 太平御覧
(唐) 李昉撰
(明) 万曆元年刊 1,010巻120冊
41. 冊府元龜
(宋) 王欽若等撰
(明) 写 1,000巻202冊
42. 事物紀原
(宋) 高承撰
(明) 万曆年間刊 10巻4冊
43. 錦繡万花谷集
(宋) 撰
(明) 嘉靖14年刊 120巻20冊

44. 新編古今事文類聚
(宋)祝穆撰
(日本)寛文6年刊 236巻100冊
45. 古今合璧事類備要集
(宋)謝維新撰
(明)嘉靖31~35年刊 363巻40冊
46. 玉海 附辞学指南
(宋)王应麟撰
(元)至元6年刊 200巻附4巻100冊
47. 居家必用事類全集
(元)撰
(日本)寛文13年刊 20巻20冊
48. 韻府群玉
(元)陰時夫編
(日本)室町時代刊 20巻10冊
49. 圖書編
(明)章潢撰
(明)万曆41年刊 127巻100冊
50. 喻林
(明)徐元太撰
(明)万曆年間刊 120巻24冊
51. 唐類函
(明)俞安期撰
(明)万曆31年刊 200巻40冊
52. 全書備考
(明)鄭尚玄訂
(明)崇禎14年刊 34巻6冊
53. 花史左編
(明)王路撰
(明)天啓元年序刊 24巻6冊
54. 經世八編類纂
(明)陳仁錫編
(明)天啓6年序刊 293巻128冊
55. 三台万用正宗
(明)余象斗撰
(明)万曆27年刊 43巻8冊
56. 不求人博覽全書
(明)撰
(明)刊 12巻4冊
57. 日記故事大全
(明)撰 張瑞図校
(日本)寛文9年刊 7巻2冊
58. 故事白眉
(明)鄧志謨撰
(明)刊 8巻4冊
59. 文林聚宝万巻星羅
(明)徐会瀛撰
(明)万曆28年序刊 40巻6冊
60. 万宝全書
(明)艾南英撰
(明)末期刊 35巻6冊
61. 燕間四適
(明)孫丕顯編
(明)万曆39年序刊 20巻3冊
62. 芸窓清玩
(明)胡文煥
(明)万曆21年刊 35巻12冊

—日本—

63. 拾芥抄
洞院公賢
江戸初期刊 6巻6冊
64. 簾中抄
江戸初期写 1冊
65. 訓蒙図彙
中村之欽
江戸中期刊 22巻13冊
66. 和漢三才図会
寺島良安編
刊(正徳3年序) 107巻81冊

67. 宝石類書
高橋宗直編
江戸末期写 132巻90冊
68. 続宝石類書
江戸中期写 15冊
69. 百科全書
明治16~19年刊 20冊

<その他>

—中国—

70. 本草綱目
(明)李時珍撰
(日本)寛文12年刊 56巻38冊
71. 本草発明蒙筌
(明)陳嘉謨撰
(明)末期刊 14巻8冊
72. 本草原始附雷公炮製
(明)李中立撰・画
(明)刊 12巻8冊

—日本—

73. 大和本草
貝原篤信
宝永6・正徳5年刊 19巻10冊
74. 大和本草紀聞
江戸末期写 10巻10冊
75. 本草図譜 巻83・84
岩崎常正(灌園)
江戸末期写(自筆) 2冊
76. 本朝食鑑
平野必大
元禄10年刊 12巻10冊
77. 物品識名
水谷豊文
江戸末期刊 2巻2冊
78. 物品識名拾遺
同 2巻2冊
79. 泰西本草名疏
伊藤圭介訳
文政12年刊 4巻3冊
80. 日本植物図説(草部イ)
伊藤圭介
明治7年刊 1冊
81. 植学啓原
宇田川榕庵
天保8年刊 4巻3冊
82. 有用植物図説
田中芳男等著 服部雪斎画
明治24年刊 7巻7冊
83. 草木花実写真図譜
川原慶賀
刊 2巻4冊
84. 張州雜志(巻13.14.97.98.99.100)
内藤東甫
江戸中期写 6巻6冊
85. 喚子鳥
宝永7年刊 2巻1冊
86. 華陽皮相
沢元愷(旭山)編 鈴木芙蓉画
寛政元年刊 3巻3冊
87. 和歌浦鯨俗語
写(江戸) 1冊
88. 牡丹名寄
北條団水
貞享5年刊 2巻2冊

3. 初 仕 事

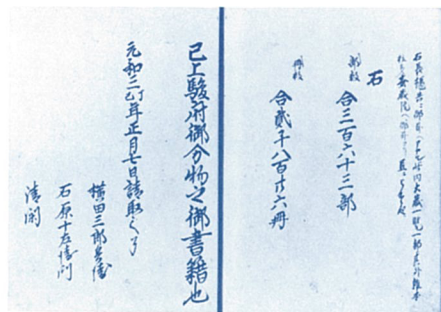
私が文庫に入って初めて手がけた仕事は、『駿府御分物御道具帳』^(注1)の内容をカード化するというものでした。この「駿府御分物」と言うのは、元和二年(1616)に徳川家康が亡くなった後、尾張・水戸・紀州の御三家に分譲された遺品のことで、これはその中の御道具類についての原簿です。書物については、別に『御書籍目録』(蓬左文庫蔵)があります。この『駿府御分物御道具帳』は、私が入る少し前に、名古屋の徳川美術館の地下室で発見されたばかりで、それ以前には、駿府御分物の御道具帳というようなものがある、ということも聞いておらず、そこに記された遺品の内容についても知らされていませんでした、それで、入ったばかりの私が、その遺品の一品一品のカードを作ることになったのです。原簿は全部で11冊あり、分厚いものですが、大きな字で書いてあるので見た目ほどではなかったのです。でも、記されている品物の種類も数も結構多くて、ひらがなで書いてあるものですから、かなり読みにくかったですね。たとえば、「へるへ」とあるのはベルベットのことだ、といった類いで、結構苦労しました。^(注2)品物としては、武器・武具の類いから布地、薬品、文房具などもありました。薬品は、朝鮮人参などの当時としては貴重なものばかりですし、文房具は硯とか墨、そのほか朱も純粹なもので、とてもいいものがそろっていました。刀剣も、いわゆる名刀揃いで、正宗や国光、吉光など、名工の作った刀はほとんど揃っていました。

カードを作るには、量もあるし慣れないしで、ずいぶん時間がかかりました。『御道具帳』には達筆で品名と数量が書いてあるだけなので、通番をつけて書いていきました。また、本自体にも番号がついていなかったものですから、1.5cm四方くらいの小さな紙きれに一〜十一までの番号を書いて、本の下の方の端のところの仮にはりつけて仕事をしました。このカードは、かなり長い間残っていたのですが、戦後のどさくさで紛失してしまったのです。戦時中に、女子学習院が空襲で焼けて、目白の本邸に入ってきたのですが、向うの方が主体になってしまって、義親先生はもう一棟あった和装の建物の方に移って学習院が西洋館に入ることになったのです。当時、文庫は資料を疎開させてあったものですから、書庫の中は空っぽで、学習院の荷物に占拠されてしまったのです。戦後、学習院が文庫を出ていったあと、どう探してもカードは出てこず、荷物の中に紛れこんでしまったようです。ずいぶん時間をかけて作ったもので、勉強にはなりましたが、その後二度と同じ物を作り直す暇はありませんでした。

織茂三郎 談(元蓬左文庫調査研究員)

注1) 徳川美術館蔵。徳川義宣氏の論文「駿府御分物帳に見られる染織品について」(『金鱗叢書』第四集所収)によれば、『駿府御分物帳』は「現在では全十一冊の大和装となっており、袋綴継目・帖合にも厳重に割印が施されてある」という。

注2) 『駿府御分物帳』に記された絹布類の名称については上掲論文に詳しい。



『御書籍目録』も、私の入る少し前(昭和9年)に、川瀬一馬先生が、書庫の隅のうず高く積まれた紙屑の間から見つけられて、歓声を挙げられたと聞いている。この本の発見によって、尾州家分の駿河御譲本の全貌が知られるようになった。

(「蓬左」第32号参照)

『駿府御分物御道具帳』(左・徳川美術館蔵)と『御書籍目録(元和・寛永)』(右・名古屋市蓬左文庫蔵)

★次回展示のお知らせ ― 市制百周年、東区制八十周年記念～江戸時代の名古屋を考える～
 「熱田の宮と名古屋城下」7月23日(土)～8月21日(日)
 「藩主と家臣の住んだ町～江戸時代の東区」9月17日(土)～10月16日(日)
 「書物愛好の風土～名古屋学の先駆者たち」10月22日(土)～12月4日(日)

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S . 50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編第12巻(S . 56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S . 51年刊)	4,000円	同 第8巻(S . 57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	同 第16巻(同)	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集	各 1,500円	同 第19巻(同)	3,000円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S . 53年刊)	2,000円	同 第17巻(S . 58年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S . 47年刊)	700円	同 第4巻(S . 59年刊)	3,000円
名古屋叢書続編総目録(S . 44年刊)	400円	同 第9巻(S . 60年刊)	3,000円
善本解題図録第一～三集(S . 55年再版)	各 300円	同 第11巻(同)	3,000円
日本の古典<蓬左文庫図録>(S . 52年刊)	200円	同 第18巻(1) (同)	3,000円
蓬左文庫・源氏物語図録(S . 53年刊)	300円	同 第18巻(2) (同)	3,000円
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1～No.15(S . 55～61年刊)	各 1,800円	同 第15巻(S . 61年刊)	3,000円
御本印型書鎮(S . 58年製)	1,000円	同 第14巻(同)	3,000円
堀田文庫蔵書目録(S . 58年刊)	500円	同 第10巻(同)	3,000円
蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円	同 第2巻	
蓬左文庫図録(同)	1,500円	一尾藩世記 上一(S . 62年刊)	3,000円
蟹江慶次郎旧蔵書目録(S . 62年刊)	500円	同 第3巻	
		一尾藩世記 下一(同)	3,000円
		同 第14巻	
		一天保会記鈔本一 (同)	3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

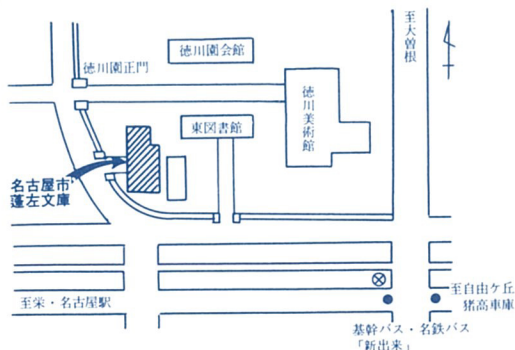
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
(月曜 〃 月・火休館)
- 年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(<名古屋駅から> 市バス(基2)「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
<栄から> 市バス(基2)「引山」「自由ヶ丘」
「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第34号 ☆昭和63年4月9日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)